

さいたま市立浦和博物館館報

あかんさす

VOL. 35-2

通号 第 93 号

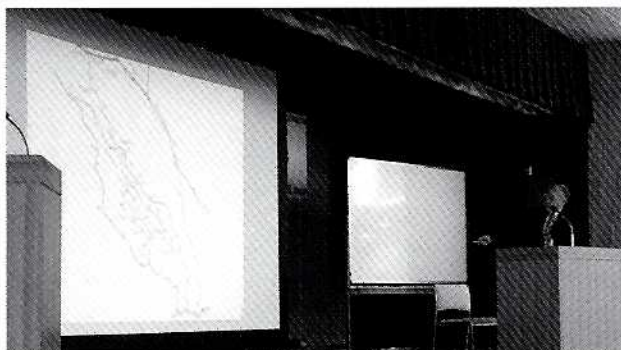
ACANTHUS : BULLETIN OF SAITAMA MUNICIPAL URAWA MUSEUM

平成18年度特別展関連文化講座の概要

平成18年12月3日(日)に特別展「綾瀬川」に関連した文化講座を開催しました。講座では、「さいたまと江戸を結ぶ水運—見沼代用水・綾瀬川を中心として—」というテーマで、日本の河川の水運の歴史が専門の千葉経済大学名誉教授川名登先生に講演してもらいましたので、ここにその概要を紹介いたします。

ただいまご紹介いただきました川名でございます。

本日は、さいたまと江戸を結ぶ水運ということでお話をするわけですが、17世紀のはじめごろに、利根川の東遷と荒川の西遷という近世初期に行われた大土木工事があり、その結果として綾瀬川という川が生まれたこととなります。ですから水運の始まりというのはそういう意味で、川が始まった時、少なくともそれ以後であると言えるわけです。新編武蔵風土記稿というのがございます。幕府が編纂した地誌です。その中に、足立郡の大門宿というところの記事に、新綾瀬川というのがあります。その記事によると、新綾瀬川を綾瀬川の脇に掘りました。これは江戸へ運送のため延宝年中に願い上して、新に掘ったという風に書いてあります。この記事が正しいとすれば、延宝年中、西暦で申しますと1673年から80年位の時には、既に船が通っているということがわかります。特に注目すべきことは、江戸へ運送のためと書いてある。江戸へものを運ぶそのために、船を浮かべたということになります。川ができて、そ



講座風景

して1670年代には船が通っていたということになると、綾瀬川自体ができた早いうちから船が通っていた。それも江戸に向かって通っていた。それが重要です。明治9年ですが、綾瀬川の流域の村々にどんな船が、どのくらいの数あったかということ調査したのがあります。その調査で、荷物を運ぶための船つまり荷船を見ていきますと、馬込と言われる一番上流かそれに近いところまで荷物を積む船が存在しています。そして、下流の浮塚が最後のところになっていますが、そこまでの間に色々な船があります。多い村では32艘あるところもありますし、16艘とか20艘とかいうのもあります。この調査では、綾瀬川のもう殆んど源流から下流まで、全流域に水運が広がっていたということがわかります。それではどんな船があったかということになります。綾瀬川の近くの村の文書で、船の名前とその年代を記述したのがあります。だいたい文政期から幕末天保期にかけてのものですが、これは幕府が関東の川船を調査し

目次

平成18年度特別展関連文化講座の概要	1
文化講座アンケート集計結果	3
行事カレンダー・日誌抄	4



て、川船に年貢をかけるための文書です。どうい
う船があるかということ役人がわからないと税
金のかけようがないので、船を識別するために作
った資料です。色々な船が載っていますが、俗に
川越船（かわごえひらた）と言われまして、荒川
だとか新河岸川だとかこの元荒川とか綾瀬川とい
う荒川水系で主に使われたのが船船です。特に川
越から新河岸川で江戸との往来が盛んだったので
川越船という俗名があります。その船は、長さが
5丈12尺から7丈78尺ありますが、一番大きい7
丈78尺上口（うわぐち）とありますけど、7丈78
尺をメートルに直しますと23.6m位、24m弱。非
常に長さが大きな船です。船の幅は、大きいので
1丈45尺、だいたい4.5m位。全体から見れば細
長い船です。この船には船室にあたる世事といわ
れるものがあります。綾瀬川ではこのような船船
が中心であったということは、別の資料を見てみ
ましてもわかります。川下小船は、荷物を積む船
として一番小さな船です。上口で2丈3尺、7m
位。幅が4尺5寸位、1m40位。こういう種類の
船が綾瀬川を上下していました。綾瀬川の下流に
笹久保新田という村がありますが、そこを通過
して上がったたり下がったりする船を寛永二年に調べた
記録があります。これは浦和博物館の特別展に現
物が展示されております。これで見ると最高に積
めるのが56石、米俵にして140俵積めるという船
が釣上新田に2艘あり、これがその調査では一番
大きな船。一番小さいのが3石、俵にして7俵半
位積める船と言うのが川下小船と言われるものだ
と思います。一番大きいのが船船で56石とか、50
石とか、48石とかそのぐらいを積む船、一番小
さいのが川下小船で3石、あるいは5石積です。そ
の間にあるのが伝馬造茶船や茶船と言うようなも
の。天保期には、この綾瀬川から小さな船でも江
戸へ直接に行く、そういう必要性が生まれてきた。
天保十五年に、西袋村（現八潮市）の伝馬茶
船が江戸へ行って、橋場番所で捕まる事件が起き
ました。伝馬茶船は、税金が安いけれど世事は作
れないことになっているのに、世事を作っていた。
それで登録違反で捕まった。何故このような
事件が起きたのか。それは綾瀬川流域の農村の生
産力が上がって、江戸に売り出すような商品がど
んどん作られたことになりました。そうするとそれ
を江戸に運ぶ船が必要になった。そして江戸へは
一日では航海できない。そこで小さな船にまで違
反を承知で世事を作った。つまり、この事件の背
景には、綾瀬川近辺の農村の生産力が向上してい
るという、そういう農村の発展というものが見え
てくるので面白いと思います。綾瀬川全体を見て

船数がどのくらいあったかという、明治9年の
調査によりますと綾瀬川の上から下まで合計して
荷物を積む船が262艘あります。それに田船の類
を入れれば860を越える船がありました。荷物を
積む船だけでもそのくらいございました。そうい
うところから見まして大体200から250艘位の船が
綾瀬川を上下していたと思います。船の種類はど
うかといいますと、やはり船船が中心だった。そ
して小さな川下小船、これが小回りのきくところ
では大いに活躍した。もう一つ綾瀬川の水運の特
徴をあえて言うと、船がある村だけに集中してい
ない。船が上流から下流に広く分散しているとい
うのは、いくつもの河岸という船着場がこの川の
周辺に広くありまして、そういうところに船がい
るわけです。ある一箇所だけに沢山の船がある
というのではなかったという、そういうのが綾瀬川
の水運の特色だとわかります。

次に見沼代用水について触れておきたいと思
います。ご承知のとおり見沼と言うのは、昔は3つ
の沼と書いたという話がありますが、いくつか
の沼を合併して一つの沼に造った。なぜ伊奈氏が
ここに見沼という沼を造ったか。これを造るの
には多くの田んぼをつぶしています。このように田
んぼをつぶしてまで大きな池を造らなければなら
なかったのはなぜか。それは、この周りの田んぼ
に用水がないからです。なぜ周りの田んぼに用水
源がなくなったか。それは前に申し上げました
が、荒川を西へ持っていき、利根川を東へ持っ
ていきました。それで、その間の田の用水に困
ったわけです。そこでこういう沼を造って、ここ
から用水を取りました。ところが幕府の享保改革
の時期になって、一番の政策が新田開発になり
ます。新しい新田を造るということです。それで
乗り込んでくるのが井沢弥惣兵衛。今度はこの
沼を乾してしまおう。水を落としてそのあとを
水田にする計画です。水を落としてしまおうと
、今度はこの沼の水を用水源にしていた周りの
村が困る。そこで、利根川から見沼代用水とい
うのを延々と引いてきて、これを見沼の水の代
わりの用水にした。だから見沼代用水と言いま
す。この後、見沼を田んぼにしましたから、こ
の田んぼの水もなくてはならないのでその水
にも使います。ということで引いてきた水を両
側の田に落としていこうという水路、これが
見沼代用水です。初期の伊奈氏の段階では、
荒川や利根川などの大きな川を動かしたこと
によって、その用水を補うものとして見沼を
造るのですが、今度は見沼を潰して新田を造
るの逆のことをやるわけです。ところが、見沼
代用水は、普通は新田を造るためだと言われ
ていますが、実



はこの用水路に船を通すことを初めから幕府は考えていた。初めからこの堀をなんと呼んでいたかという、工事が始まる以前に村に回した廻状の中に「此度、見沼其外所々小沼新田並利根川新井路御普請被仰付候二付」と書いてあります。これからやる工事は、見沼を潰して新田を作る工事と並びに利根川新井路を造る工事であると言っています。この用水路を利根川という。なぜこれを利根川と言うか疑問を持ちませんか。これは元々荒川の旧河道跡。荒川と言うのは驚かない。この辺は荒川です。利根川は遥かこの東の方を流れている。見沼へ造る水路をなぜ幕府は利根川と呼ぶのか。そういう疑問を私は持った。調べていきましたと、幕府が造ろうとしたこの用水は、新田開発と同時に実は江戸と北関東を結ぶ大輸送路なんです。江戸川も後に掘ったのですが、昔は利根川とも言われていました。これが江戸に入ってくるメインのルートです。このメインの利根川輸送路に対する近道として、荒川と隅田川を使いました。そして、この大輸送路を利根川を使うよりもっと近いところで江戸に結ぼうとしました。ですから利根川新井路、利根川の新しい水路なのです。見沼代用水を造るためのもう一つの大きな目的は、利根川に代わる江戸へ行く水運路、それも早い水運路をここに造ることなのです。ですから、代用水が綾瀬川と元荒川とに交差するところ、そこには最初、船が通れるように川の上に橋を架けまして、橋の上を水が流れるようにしました。船が橋の上を走るのです。日本は木でこれを造って、それを船がこの上を通過して行けるよう造った。残念ながら木で造ったので壊れてしまった。それで駄目だということで川の下を通すことにした。そうするともう船は通れません。ですから船としては結局ここが終点になります。ここから上には行けなくなった。結局ここから下だけの江戸を結ぶ水運路という局地的な、地域的な水運ということに留まってしまって、幕府が一番最初に目指した利根川に代わる大水運路をここに作ろうという計画は失敗に終わった。しかし、造るまではそれを目指してやった。ですから皆さんご存知の通船堀を最初から造った。後で船を通すためではなくて、見沼干拓をやると同時に造っている。これは一連の工事です。決して別のものではなかった。そういう意味で、余り知られてないのですが見沼代用水というものには、水田のための用水の役割と、もう一つの大きな目的つまり利根川に代わる水運路の役割があったんだということをお話し致しまして終わりにしたいと思います。(M)

文化講座アンケート集計結果

文化講座受講者の講座に対する要望及び講座運営などに関する意見等を把握するため、今回アンケートを実施したので、以下にその概略を紹介します。

当日の受講者は、事前申込者が88人、内出席者は65人、当日申込者が16人、名簿上は104人で、実出席者が81人でした。地域別では、市内64人、市外12人、県外5人でした。市内では旧浦和市が多く、浦和区14人、南区12人、緑区9人でした。やはり開催館及び開催地の関係と思われる。

アンケートは資料と一緒に配布し、講座終了後回収しました。回収数は68枚で、各設問の回答は複数のももありました。集計は、各設問ごとに他の設問とクロスして分析しました。

第1問 今回の講座はどのようにして知りましたか。

講座に対する情報源として、やはり市報の役割は大きく37.3%を占めました。館独自の特別展のチラシなどが48.7%になり、これは市報よりも多く、市報とは別に、館独自の広報の重要性が理解できます。また、講座開催の情報源による受講者の特徴は特にみられませんでした。

第2問 時間配分はどうか。

時間配分については、今回の1時間半がちょうどよいが大半の73.5%を占めていますが、実際このくらいの時間が飽きず、疲れずという時間と思われる。ちなみに、短い10人いましたが、設問5の満足度で不満は1人のみでしたので、必ずしも時間の短さが内容の満足度に影響しない事がわかります。

第3問 内容について。

よくわかったが66.2%で半数以上を占めているので、内容的には受講者に受け入れられたと思われる。わかりにくいと少しやさしいが、それぞれ1割ほどでしたが、これは受講者が講座のテーマをどう捉えていたかによって分かれたと思われる。

第4問 参加の動機は。

題名に興味があったが半数以上の62.7%を占めるのは当然と思われる。また、講師に興味があったが1割近くを占めるのは、講師の知名度が高いと思われるので、講師の選定においても適切と思われる。文化講座によく出席すると博物館の講座だからの合計が25.3%を占めることは、浦和博物館が地域博物館として存在感があるということを示していると思われる。また、題名に興味があった受講者の90.1%が満足したことは、テーマと内容が整合していたことが窺えます。

第5問 講座全体について。

とても満足したとまあまあ満足したが、講座に対して満足度の高い受講者であり、それらの合計が6割以上になり、普通を合計すれば9割近くの受講者が満足したことを示しており、講座自体の評価としては成功といえると思われる。

第6問 次回のテーマとして、希望するものがございましたらお書きください。

受講者の多くが参加の動機として題名を挙げているので、地域の歴史に関連したテーマ等が多いのは当然と思われる。

第7問 そのほか、ご意見、ご感想等がございましたら、ご自由にお書きください。

舞台設定上の指摘が多く、特にマイク、白板の使用方法については、主催者としても反省するところが多かった。

以上が、文化講座受講者のアンケート結果ですが、受講者81人中アンケート回答数68枚、実に受講者の84パーセントが回答したことになるので、文化講座受講者の意見としては充分有効と思われるので、この結果を次回文化講座へ向けての参考に使いたいと思います。(M)



行事カレンダー 開館時間 9時～16時30分

☆春季企画展「ふるさとの遺産 —写真でみる南区の文化財—」

会期 4月20日(金)から7月1日(日)まで
内容 昨年度より市内に点在する指定文化財を地域ごとに紹介していますが、今回取上げる地域は南区です。(昨年度は緑区)南区は市内で最も人口の多い区で、近年、急速な宅地化が進み、都市へと変貌してきています。しかし南区にも県指定有形文化財である内谷氷川神社本殿をはじめ、多様な文化財が点在しており、これら先人が大切に伝えてきた文化遺産を写真パネルで紹介しします。

☆企画展「夏休みチャレンジ博物館」

会期 7月13日(金)から9月30日(日)まで

内容 小学生を対象に、縄文人の顔、大昔の人々の暮らし、見沼通船堀などをテーマにしたミニ展示。
 7月26日(木)から29日(日) 昔のあそび
 7月28日(土) 昔のおもちゃづくり
 7月29日(日) クイズ大会
 7月31日(火)から9月30日(日) 文化財さがし

☆定例探鳥会〈毎月第3日曜日開催〉

(雨天中止)

会期 4月15日(日)・5月20日(日)・6月17日(日)
 7月15日(日)・8月19日(日)・9月16日(日)
 9時から12時(9時に当館集合)

参加費 中学生以下50円、高校生以上100円

日誌抄 (平成18年10月から平成19年3月まで)

10/1(日) 常設展終了
 10/2(月)～6(金) 展示替による休館(企画展→特別展)
 10/3(火) 資料貸出1件・特別展用資料借入2件
 10/7(土) 特別展「綾瀬川—市周辺流域のものがたり」
 10/10(火) 資料貸出2件
 10/13(金) 団体見学1団体
 10/15(日) 定例探鳥会
 10/17(火) 城北小3年体験
 10/19(木) 中島小4年総合学習
 10/20(金) 蕨東小4年見学
 10/22(日) 団体見学1団体
 10/25(水) 団体見学1団体
 11/1(水) 団体見学1団体
 11/2(木) 原山小3年体験・川口柳崎小3年体験
 11/10(金) 大門小3年体験
 11/19(日) 定例探鳥会
 11/21(火)～22(水) 中学生職場体験(木崎中1年)
 11/29(水) 埼玉県博物館連絡協議会県外研修会(千葉県立房総のむら他)
 11/30(木) 資料寄贈1件
 12/2(土) 博物館見学実習(埼玉大学)
 12/3(日) 文化講座・特別展終了
 12/4(月)～8(金) 展示替による休館(特別展→企画展)
 12/9(土) 企画展「ちょっと昔のくらしの道具展」開催
 12/17(日) 定例探鳥会
 12/22(金) 資料寄贈1件

1/6(土)～8(月) 昔のあそび(体験教室)
 1/7(日) 資料貸出1件
 1/8(月) おもちゃ作り(体験教室)
 1/9(火) 北浦和小3年体験
 1/21(日) 定例探鳥会
 1/24(水)～26(金) 中学生職場体験(美園中1年)
 1/25(木) 栄和小3年体験
 1/26(金) 芝原小3年体験
 2/6(火) 上木崎小3年体験
 2/14(水) 大久保東小3年体験・河合小3年体験
 2/18(日) 定例探鳥会(雨天により中止)
 2/23(金) 資料寄贈1件
 3/1(木) 埼玉県博物館連絡協議会後期研究会(川越市立博物館)
 3/2(金) 資料寄贈1件
 3/7(水) 第3回博物館協議会(市立博物館)
 3/14(木) 企画展用資料借入1件
 3/18(日) 定例探鳥会
 3/24(土)～25(日) 昔のあそび(体験教室)
 3/25(日) 紙芝居を見よう(体験教室)

さいたま市立浦和博物館館報 **あかんさす** No.93
 編集・発行 さいたま市立浦和博物館
 〒336-0911 さいたま市緑区三室2458番地
 TEL・FAX 048-874-3960
 発行日 平成19年3月31日
 ホームページ <http://www.city.saitama.jp>
 E-mail urawa-museum@city.saitama.lg.jp

